なぎさは海のゆりかご

海のゆりかご通信　No.18　Feb.2011

～　藻場・干潟・サンゴ礁・ヨシ帯・浅場…　「なぎさ」は人と海との共生の場　～

「なぎさシリーズ」
茨城県にある日本で ２ 番目に大きい湖の霞ヶ浦。このとなりに、日本で 15 番目に大きい湖「北浦（きたうら）」があるのをご存じだろうか。今回の旅は、北浦に茂るヨシ帯をまもる漁師さんやその奥さんを、漁師ファンである足利さんが訪ねました。

なぎさシリーズ No.１４

魚がすめる湖をめざして・・・

足利由紀子

霞ヶ浦？　北浦？

いつになく寒い１月、沿道の田んぼはまだ霜がおりている朝の８時半、北浦に到着すると、もう作業が始まっていた。水辺に茂ったヨシを刈払機で刈る男性陣と、それを束ねる女性陣。みるみるヨシ原がなくなって、向こうに広々とした水面が現れた。

茨城県の霞ケ浦。地図ではお馴染みの場所だが、実際どこからどこまでが“霞ヶ浦”なのかというと、西浦（霞ヶ浦）・北浦・常陸利根川・鰐川の各水域の総体を総称した名前なのだそうだ。その、一番大きな西浦の東側に細長く広がっている“北浦”で、

「きたうら広域地区環境・生態系保全活動組織」によるヨシ帯の保全活動が行われているということで、取材に訪れた。８カ所ある対象地区の中で最も広い面積の蔵川ヨシ帯で行われている活動を見学しながら、活動組織の副代表の海老澤さんにお話をうかがった。

魚を取り戻すために

霞ヶ浦･北浦で漁獲される主な魚種はワカサギ、シラウオ、テナガエビなど。昭和５３年には１７，０００ｔあった水揚げが、

都道府県:	茨城県
地域協議会:	霞ヶ浦北浦環境･生態系保全対策地域協議会
活動組織名:	きたうら広域地区環境･生態系保全活動組織
協定先:	行方市、鉾田市、鹿嶋市
構成員数:	98名
対象資源:	ヨシ帯
活動内容:	計画づくり、モニタリング、ヨシ帯の刈り取り、保護柵の設置、浮遊･堆積物の除去

今では往時の１割強まで落ち込んでしまった。霞ヶ浦と言えば、湖の富栄養化や肉食性の外来魚の増加などの問題がよく話題になるが、湖岸の護岸建設により、産卵や育成の場であるヨシ帯が大きく減少したことも、漁獲減少の原因のひとつと考えられている。「魚がすめる湖を目指そう」この状況を打開しようという思いから、１０年前にヨシ帯保全の活動が始まったそうだ。

保護柵設置と住民参加

第一に取り組んだのは、護岸による反射波からヨシを守るための保護柵の設置。予算がなかった当時、地域の企業にスポンサーになってもらい、友人の協力を得ながら竹山から孟宗竹を切り出し、岸に設置した。県や市にも手伝ってもらいながらの試行錯誤だったと、海老澤さんが当時の苦労を語ってくれた。「行政に文句言うには、自分

たちも行動しないと」という言葉の通り、まず自分たちでできることを行動で示すことにより、徐々に地域の理解を得られるようになったそうだ。口で言うのは簡単だが、なかなかできることではない。それ以来、毎年計画的に竹を切り保護柵を設置しているが、平成２１年度からは環境・生態系保全活動支援事業を利用して実施している。早速、矢幡ヨシ帯を見に行く。湖岸の縁に沿うように広がるヨシ帯の向こうに、およそ１００メートルに渡り３列、孟宗竹がきれいに並べられている風景は、湖の景色と調和していて美しい。この日は天候も良く

湖面は穏やかだが、それでも柵の向こう側はさざ波が立っているのに対し、柵の手前の水面は静かである。保護柵の消波効果がうかがえる。これに使用する竹の切り出しは、海老澤さんの声かけの下、２０名程の地域住民が活動組織のメンバーとなって協力してくれているのだという。「直径１０センチ、長さが４メートルの竹が３０００本くらいかな」使っている孟宗竹の数をうかがうと、何気なく答えてくれたが、素人が孟宗竹を３０００本切り出すのは大変なことである。私も地元の海で利用する竹をたくさん切った経験があるので、その作業がどんなに大変かは想像がつく。協力して

くれる市民に、活動の目的や重要性がきちんと伝わっていなければ、長い期間継続できない活動である。漁業者と市民が共に行う保全活動として、見習うべきところは多いのではないかと思う。「１０年経っても抜けたところはあまりない。竹を切ることで、山もきれいになって、ヨシも守られて、一石二鳥」と海老澤さんは誇らしげだった。

元気なヨシ原に

　矢幡ヨシ帯を後に再び蔵川ヨシ帯に戻る。朝からここで作業をしているのは、この地区の漁業者である大和支部の皆さんだ。話をうかがうと、ご夫婦で半農半漁の生活だそうで、休漁で手の空くこの時期に作業を行っているのだそうだ。ヨシの刈り取り作業は５年前より開始、保護柵と同じく平成２１年度より環境・生態系保全活動支援事業で実施している。きたうら広域地区環境・生態系保全活動組織は３市、４地区から構成されるが、それぞれの地区の漁業者が地先のヨシ帯の保全活動に携わっている。枯れたヨシを刈払機で刈り取り、刈り取った後の浮遊・堆積物を除去する。刈り取ったヨシはヒモでまとめられ、土手で乾燥した後、地元の農業生産法人に運び堆肥として活用される。地域内で循環利用されているところが素晴らしい。ご高齢の方が多いが、それにしても皆さん、朗らかで働き者である。ご夫婦の仲がよいのは、一緒に漁に出ているからだとか。深いところでは膝あたりまで水につかる上、急に深くなる場所もあり、足下がおぼつかない現場で作業が進められていく。朝は枯れたヨシ原だった場所が、夕方にはきれいに片付けられ、湖面が見えるようになった。

　こうしてきれいに刈り取られたヨシ原は、３月になると新しい芽吹きが起こり、４月

には青々としたヨシ原になるのだという。ヨシ原が元気になると、魚にも確実に良い影響がでるそうだ。「漁場が良くなれば、魚が増える。漁業者の意欲も出る。地元の人たちもきれいになったねと喜んでくれる」「以前はごみ捨て場のようだったんだよ。でも、昨年頃からごみを捨てる人がいなくなったねえ。漁協のみんなが頑張っている姿を見ているからだよ」。休憩時間に出る話は明るい。皆さんの努力が確実に地域の中で実を結んでいるのではないかと感じた。

伝えることの大切さ

「そういえば、この柵って何のためにあるのか、一般の人にはわかりませんよね」保護柵を見学していると、同行してくれた茨城県霞ヶ浦北浦水産事務所の武士さんがひとこと。確かに、説明がないと、ずらりと並んだ竹が何かわからない。漁業者と地域住民が北浦に魚を取り戻すため、そして地域の環境を良くするために、知恵をめぐらせて頑張っていることを、多くの人に知ってもらう必要はあるように思う。事業や取り組みの説明をする看板があるといいねと話しをした。環境・生態系保全活動支援事業の目指すもののひとつとして、地域に向けた啓発も大切な要素であるだろう。

海老澤さんは「笹浸し」と呼ばれるつけ漁を小学校の子どもたちと行ったり、外来魚を使った料理の開発なども考えたりしているという。これもまた、地域の子どもたちに向けた環境学習であり啓発である。お話をうかがっていると、「地域社会への還元」「循環型社会」「観光漁業」などという言葉がぽんぽん飛び出してくる。アイデアマンであり、地域のよきリーダーなのだろう。こういう方が引っ張っていく環境・生態系保全活動支援事業は将来がとても楽しみである。

「漁場を守るための精一杯の意思表示を行えば、地域のみんなも考えたり守ったりしてくれる。言葉でなく態度で伝えればいい」。海老澤さんの言葉が印象に残った。できることをできる範囲で、“無理じゃない現実的”な感じが北浦の活動らしくていいなと感じた。

～ 著者プロフィール ～

足利由紀子（あしかがゆきこ）氏
NPO 法人水辺に遊ぶ会　理事長

里海里浜を目的に、地元の中津の干潟をフィールドに自然観察会や調査研究活動を展開。また、海や干潟の保全に漁業者が必要不可欠と、交流を深め、現在漁業者とともに漁業体験活動も行う。

「藻場・干潟・浅場・サンゴ礁・ヨシ帯の保全活動」事例発表会の開催
“なぎさの守人”シンポジウム 2011

“なぎさ”（藻場・干潟・浅場・サンゴ礁・ヨシ帯など）の保全に取り組み、その働きを復活させようとがんばる漁師・市民・行政･･･そんな“なぎさの守人”たちの活動を紹介するシンポジウム中央大会が 2 月 28 日にいよいよ開催されます。

日本での農村暮らしを経て、日本国内、海外の農山漁村を調査しながら歩く”あん・まくどなると”さんや全国のなぎさの守人たちを招き、ディスカッションします。どうぞ皆さまお誘い合わせの上、お気軽にご来場ください。

日時：2 月 28 日 13:00～
場所：グランドアーク半蔵門（3F 華の間）
定員：200 名（参加費無料）

詳しい情報は
ひとうみ.jp へ （http://hitoumi.jp）

～ 編集後記 ～

今回の取材では、実際に保護柵を作るときに利用される竹山も見せてもらった。クレソンやレンコンが栽培される谷戸をながめながら、車で走ること 30 分、目的地についた。

キレイで明るい竹山である。整然と並ぶ孟宗竹、笹と笹の隙間からチラチラとそそぐ光。森林浴ならぬ、竹浴である。

私の家の近所にも、真竹が生い茂る山があるが、そこは倒れた竹や倒れてもまだまだ生きようとガンバル斜めに伸びた竹など、思い思いの竹が無秩序に生え、足を踏み入れる隙間がない。また、竹林の中は暗くひんやりしており、入っていくのが恐ろしいぐらいだ。

活動組織の副代表の海老澤さんがいう「明るいだろう。竹林も利用すれば、こんなにキレイなんだ」。ほんとに、そのとおりである。利用され、手入れされる竹山のやわらかさ、あたたかさをまじまじと感じた。

「この竹は、今年生えたヤツ。大きいだろう。立派だろう･･･これもそうだ」海老澤さんの言葉に竹への愛着が感じられる。その時、フッと疑問に思った。どの竹も同じぐらいの背丈なのに、海老澤さんは、次々に今年育った竹を指さしていく。なぜだ･･海老澤さんに種明かしをしてもらった。「今年生えて育った竹は、もう立派に育っているけど、根もとのこの皮はまだ残っている」と指さしたのは、タケノコの皮をまとう竹の根もとであった。なるほど、こんなに生長していても、まだオムツはとれていないのである･･･判りやすい。

しかし、年齢にしてようやく 1 歳になろうとする孟宗竹の背丈は、既に見た目で何 m あるのか判断がつかないぐらい伸びている。本当に不思議な生き物である。ただ、1 年目の竹はやわらかすぎて使い物にならないそうだ。また、竹を刈るのは水分が抜ける冬でなくては使い物にならないことも教わった。ちなみに、この竹山は友達の持ち物だそうだ。こうした地元ならではのつながりが、上京人である田舎ものの私にとっては、すこぶるうらやましい。（吉）

環境･生態系保全活動支援推進事業（水産庁補助事業）
JF全漁連 漁政部 環境・生態系チーム
Tel 03-3294-9617 E-Mail gyosei-6@zengyoren.jf-net.ne.jp